



Title	テキストとしての〈アメリカ〉：‘冒険の終わり’としての『ハックルベリー・フィンの冒険』
Author(s)	森野, 豊
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 55-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78176
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テキストとしての〈アメリカ〉

— ‘冒険の終わり’ としての『ハックルベリー・フィンの冒険』 —*

森野 豊**

Mark Twain, in his *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) uses an ambiguous word, “Territory”, in the last of Chapter. “Territory” has been interpreted as representing the place where Huck’s aspiration for the ‘other place’ will be realized and as implying, at the same time, his ‘intrusion’ into the Indian land adjoining the Mississippi Valley.

William Shakespeare’s *The Tempest* provides us with a means whereby to consider “Territory”. The “isle” which constitutes the scene of this play, like “Territory” for Huck, reveals itself as an ambiguous place. This “isle” appears as a colony where Westerns actually exploit a native, Caliban, and it connotes a “utopia” which is a fabrication of Western philosophical discourse, and leads us to assume “Caliban as a native”, an idea in which Caliban is given a status of the controlled in the Elizabethan colonialism. because it is both When Caliban represents his “native land” as “utopia”, he subconsciously effaces both the “otherness” of himself and of his native “isle” from the history of colonialism.

本論は、Mark Twain の『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*)の最終章の、特に、最後の数行に記されている“The Territory”(以下 Territory と略記)という言葉の意味を、このテキストの主要なプロットを構成する *Huckleberry Finn* (以下 Huck と略記) という少年の冒険との関連において捉え直してみることを目的とするものである。なお、本論で言及する Territory という言葉の歴史的な意味が、「アメリカ・インディアン居住地」、つまり、アメリ

*“America” as a Text — *Adventures of Huckleberry Finn* as the ‘End of Adventures’ — (Yutaka MORINO)

**言語文化研究科博士後期課程

カ大陸の原住民の存在に関わるものであることから、今日ポスト・コロニアリズムという視点から読み直されている William Shakespeare の『テンペスト』(*The Tempest*)との関連において、特に原住民の島の問題に触れつつ論を進めるといふ形をとる。Twain と Shakespeare の二つの文学テキストに読み取られる〈アメリカ〉という場所、言わば、‘テキストとしての〈アメリカ〉’という場所が、本論の考察の対象である。

1 〈‘他の場所’ = 「他者」の場所〉としての〈Territory〉

『ハックルベリー・フィンの冒険』は、ミシシッピー河とその沿岸を舞台に、14才の少年 Huck が遭遇したり、巻き込まれる様々な出来事の記録である。そして、この出来事は、常に、彼の冒険が‘場所’と関係している点に注目することによって見えてくる。元来、この冒険は、学校や教会に行かせることによって、彼を「文明化」しようとする Douglas 未亡人や、逆に彼に物理的な暴力を振るい続ける野蛮な父から、彼が逃走することによって始まる。この冒険の出発点とも言うべき St. Petersburg という町は、「文明化」と「暴力」という一見相反する二つの行為が、彼に対して及ぼされる場所である。従って、結局、文明化であろうと物理的な暴力であろうと、Huck 自身に向けられる力そのものから逃れることが、彼の冒険の‘動機’である。そして、その後延々と続けられる冒険において、彼が一体何から逃げようとしたのか、と問うとすれば、逃走の目的が何であるにしても、その実現が、まず社会的・物理的な諸力に満ちた〈町〉という場所そのものから離れることによってのみ可能であったことは、十分強調されねばならない。

町という場所から離れることによって始まる彼の冒険は、必然的に‘他の場所’に行くことによってのみ終わる。まず最初に‘他の場所’の機能を務めるのは、Huck が町を離れて逃げ込むミシシッピー河に浮かぶジャクソン島である。「目を覚ますと日があまり高いので、まあ八時過ぎかな、と判断した」「僕はこの島の大将なんだから、まあこの島は全部僕の物だ」(第8章)¹⁾という彼の言葉を通して見えてくるこの島は、無制限な時間と自由に探検できる空間を彼に与える場所である。ここは、時間とか空間といった社会の枠組みすら成立しない、自然が創り出した一種のユートピアであるとさえ言える。

¹ Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, Walter Blair and Victor Fischer eds. (Univ. of California Press, 1988), Chap. 8, p. 45, 及び同章 p. 48.

しかし、所有者から逃亡してこの島に逃げ込んだ黒人奴隷 Jim との出会いが、もはや彼がそこにいることを許さなくなる。Jim を解放するために、再び彼は‘他の場所’へと移動しなければならない。その後の彼を待ち受けているのは、14 歳の少年にはあまりにも苛酷な社会の現実である。Jim 解放を妨げる奴隷制度の暴力性のみならず、その過程で彼らが行き着くミシシッピー河岸は、このテキストでは、制度以前の生々しい暴力が行使される場所として描かれる。河を漂う家の中に死体を目撃することに始まり（第 9 章）²⁾、彼は、その後多くの暴力と死に直面することになる。昔から確執が続いていたという理由だけで殺しあう二つの家族の闘争の中で、死んでしまう少年（第 17-18 章）³⁾。或いは、殺人の見返りに私刑に処されそうになる男（第 21-22 章）⁴⁾。このような様々な暴力に満ちた〈河岸〉に対し、〈河〉、いや、Jim 解放の地カイロに向かうために、彼らを用いる〈筏〉という場所が、ここでは‘他の場所’の機能を務める。「他の場所だと、すごく窮屈で息が詰まる思いがするけど、筏は違う。筏の上では、すごく伸び伸びできて、気楽だし、居心地もいい」（第 18 章）⁵⁾という彼の言葉からも、そのことは明らかであろう。言い換えれば、ジャクソン島を離れた Huck の冒険は、ここに来て〈町→‘他の場所’〉から〈河岸／筏〉へと、冒険の舞台は移される。とにかく、このように連鎖して描かれる社会の暴力と‘他の場所’としての〈筏〉への移動によって、このテキストのプロットが、より充実したダイナミズムを与えられることは確かである。

では、このテキストにおける最後の‘他の場所’はどこか。Jim 解放をとにかく実現すると共に〈河岸／筏〉という図式は消滅し、再び、町という場所から離れることが彼の課題となる。「サリー叔母さんが僕を養子にして人並みの人間にしようとしている」場所としての町を離れ、彼は、‘Territory’に向かうことを決める：「僕は他の連中より先にインディアン居住地に出掛けなければならない」（最終章）⁶⁾。従って、‘他の場所’を求める彼にとっての‘Territory’は、ジャクソン島の如く、一種のユートピアでなければならない。だが、ここで、ジャクソン島が自然の産物であるのに対し、‘Territory’というものが、人為的に創られた場所で

²⁾Ibid., Chap. 9.

³⁾Ibid., Chap. 17-8.

⁴⁾Ibid., Chap. 21-22.

⁵⁾Ibid., Chap. 18, p. 155.

⁶⁾Ibid., Chap. the last, p. 362.

ある点に注目しよう。まず、その歴史的背景に少し触れてみよう。

作者 Twain は、このテキストの舞台を、その執筆時の約 40 年から 50 年前である 1840 年頃のミシシッピ河岸地域としている⁷⁾。ここは、19 世紀後半に「フロンティア学説」を提唱した歴史学者 F. J. Turner によって、大陸西部地域へ向けてのいわゆる開拓者精神を支える「民主主義の故郷」と呼ばれた場所である⁸⁾。一方、「原住民居住地(Territory)」は、1820 年代から 30 年代にかけて、アメリカ・インディアンつまり〈原住民(native)〉が強制的に移住させられて作り出された‘場所’である。そこは、アメリカ合州国を構成する一つの州(State)ではなく、委任統治者の行政区画として、言わば、西欧諸国からの移民達の民主主義の新たな「故郷」に包囲されることによって、陸の孤島であるかのように存在していたのである。また、そのように外的な力によって作られた場所は、法的な権利を奪われた白人の無法者達の避難場の役割をも果たしていた⁹⁾。

これらのことを受けて言えば、Territory という場所は、単なる「領土」でも「元々住んでいた者達」という意味での〈原住民〉の居住地でもない。それは、明らかに外的な力の産物である。つまり、この場所は、開拓者精神に支えられる移民達が、アメリカという土地を「民主主義の故郷」としての「自由な土地」と表象するとき、その対立物として作り出した「非・故郷」なのである。また、この Territory は、移民の白人無法者達に侵入されることによって、政治的な諸権利が存在しえない場所としても表象される。移民達がこの土地に侵入するまで、おそらく原住民は、この土地が「非・故郷」あるいは「故郷」であるということも、また自らが〈「原」住民〉であることも意識していなかったであろう。そんな彼らが、突然「非・故郷」としての Territory に追いやられ、また、非・アメリカ人としての〈原住民〉ないしは〈土人〉という、実に矛盾した立場に置かれることになった。ここで為されている「暴力」は、単に法や規則を破る(violate)行為を指すのではない。それは、「他者」の権利を侵す(violate)行為であり、同時に、violate すべき「他者」としての〈原住民〉という立場そのものを作り上げるものでもあった。〈原住民〉とは、このように無理やり「他者」として表象された者達の代名詞である。そして、Territory は、「他者」性 (otherness) を、その土地を指し示す言葉そのものによって語っているのである。

⁷Ibid., “Explanatory Notes”, p. 372.

⁸F. J. ターナー(松本政治他訳)『アメリカ史における辺境』(北星堂書店 1973) p. 206.

⁹Twain, op.cit., “Explanatory Notes”, p. 422.

以上の事を確認した上で、『ハックルベリー・フィンの冒険』に戻ろう。すると、Huck にとって、ジャクソン島に代わる‘他の場所’としての〈テリトリー〉は、すでに彼に先立って、そして彼とは違った意味での‘他の場所’、いや、極めて暴力的な歴史の痕跡としての‘「他者」の場所’として現われる。さらに、我々がここで直面しているのは、町や沿岸における様々な暴力を描いてきた Huck が、「Territory に行く」ことを決意することによって、逆に、インディアン居住地への侵入という歴史的な暴力を反復しているのではないか、という指摘である¹⁰⁾。奴隷制度という歴史的な暴力に悩んだ彼が、ここでは原住民に対する暴力に自ら参与していることになる。そして、このことを‘場所’の問題とあわせて言えば、〈町→‘他の場所’〉〈河岸／筏〉といった図式が醸し出してきたダイナミズムは、ここではく‘他の場所’としてのユートピア＝「他者」としての原住民の場所」という極めてアイロニカルな問題に変換されているのである。

無論、我々は、このような解釈の基盤が、文学テキストの言葉と史実を語る言葉という異なった二つのレベルの言説を混同することによって成り立つものであることを指摘することはできよう。しかし、本論の立場は、この‘場所’の問題を、Huck の冒険にとっての一種のアイロニーとして結論付けることを、とりあえず拒否する。つまり、単に Huck 自身が、侵入という暴力を意図しているかどうかを問うのではなく、その前に、文学テキストが史実に触れるという出来事を如何に考察すべきかということが問題である。さらに付け加えれば、この〈Territory〉について考察することは、その語を含む最終章の最後の数行といった些末な箇所のみならず、彼の‘他の場所’への冒険そのものの再考、つまり、『ハックルベリー・フィンの冒険』というテキスト自体の再考への一つの鍵にもなる。従って、最初にも触れたように、このことを『テンペスト』— 新大陸発見という史実に関わる特権的な文学テキスト — に読み取られる〈原住民〉の場所の問題から考え、その後で、再び〈Territory〉という‘場所’の「他者」性について考察してみたい。

2 心象地理としての〈原住民＝Caliban〉

『テンペスト』における〈アメリカ〉という‘場所’は、主に Caliban という登場人物の存在によって示されている。彼は西欧から追放されて、ある島にきたミ

¹⁰Roy Harvey Pearce, "Your Truly, Huck Finn", in Harold Bloom ed., *Modern Critical Views: Mark Twain* (New York, 1986), p. 179.

ラノ公 Prospero によって支配される〈原住民〉である。この島は、形式的には、地中海に存在するものと仮定される。しかし、Caliban の名が「カリブ海周辺の住民・言語・場所」に関する‘Caribbean’ という語に由来することや、このテキストの source の一つとされる新大陸に関するパンフレット、特に「ヴァージニア植民地」に関するパンフレットの存在からも、本質的には、Caliban を〈アメリカ〉の〈原住民〉として見るのが妥当である¹¹⁾。さらに、このテキストに書かれる‘a brave new world’ という言葉¹²⁾を出発点にして、新大陸の言説に属する様々な言葉をこのテキストの中に見いだす作業も為されていることも付け加えておく¹³⁾。従って、Caliban 及び彼の島の「他者」性について触れることは、まず〈アメリカ〉に出会うことであるといつてよい。また、〈原住民(native)〉の語が、「生れながらの」という形容詞であると同時に、「生まれた‘場所’」という意味をも含んでいることから、〈原住民〉としての Caliban という設定自体が、必然的に、〈アメリカ〉という‘場所’への問いに繋がる。つまり、ここでは〈原住民〉の場所と同時に、〈原住民〉という言葉そのものに刻印された‘場所’が、考察の対象となる。

だが、我々がこのテキストで出会う Caliban は、決して〈原住民〉ではなく、彼を「発見」した当時の西欧の言説における‘否定＝他なるもの’、具体的に言えば、魔女シコラクスの子であり、暴力性を象徴する‘monster’である。その描写は、「足が四本で声が二色」の「魚の匂いがする古びた鱈みたいな物」という非・人間的な言葉によってなされる¹⁴⁾。そして、彼の行動もまた、島の支配者 Prospero への反逆者として、十分すぎる暴力性に彩られている。言葉を罵るための道具としてしか認めない Caliban。Prospero の娘の Miranda への性的暴行を仄めかす Caliban。暴力的に振る舞いつつも、酒を与えられて、Prospero の敵の Stefano や Trinculo の奴隷に成り下がる Caliban。彼のこのような面に対する従来の解釈が、‘monster’以外に、恐るべき「混沌」あるいは「無秩序」といった言葉によって為されてきたのも無理はない¹⁵⁾。さらに、19 世紀には、かつて西欧諸国の植民

¹¹ See Geoffrey Bullough ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Volume VIII, (London and New York, 1975), pp. 295-9.

¹² Frank Kermode ed., *The Tempest*, New Arden Shakespeare (London, 1962), act. 5, sc. 1, line 183.

¹³ See, for example, Charles Frey, “*The Tempest and the New World*”, *Shakespeare Quarterly*, Vol. 30 (Winter 1979), p. 29.

¹⁴ Ibid., act. 2, sc. 2, lines 25-6, 及び lines 91-2.

¹⁵ Rose Abdelnour Zimbardo, “Form and Disorder in *The Tempest*”, D. J. Palmer

地であった南米諸国の作家によって、当時のアメリカ合衆国の膨張主義政策への批判として、彼は、野蛮なヤンキーのメタファーとしても語られた¹⁶⁾。つまり、自らの‘場所’であるはずの新世界諸国にまで‘否’の烙印を押された Caliban は、西欧の言説が生産した究極の‘他なるもの’である。我々は、一体どこで〈原住民〉としての Caliban に出会えるのだろうか。あるいは、Caliban は、本当に自らを〈原住民〉として語っているのか。

〈原住民〉という言葉の鍵が、ある‘場所’、つまり、自らが生まれた場所への言及において読み取られるのであれば、〈原住民＝Caliban〉という設定は、必然的に‘Caliban の島’を前提とせざるをえない。なるほど、彼は、このテキストにおいて、この島が「キャリバン一族の物」であるがゆえに、「自分の島を還せ」と主張する¹⁷⁾。だが、魔女シコラクスを母とされる彼にとって、自らの「生まれ」に言及することは、西欧の言説における‘否定＝他なるもの’に回収されることに他ならない。それでも島を取り戻そうとすると、その目的のための代償である過激な暴力が、さらに彼を‘否定＝他なるもの’として表象する。従って、〈原住民＝Caliban〉は、‘否定＝他なるもの’としての自分を自ら否定することによってしか現前しえない。言い換えれば、彼が〈原住民〉たりうるのは、まさに彼が、自らの島を言説に属さない「他者の場所」として語る瞬間にかかっている。そこで、本論が注目するのは、次の Caliban の台詞である。

Caliban : 怖れることはないんだよ — この島はいつも妙な音に充ちていて、音楽や気持のよい歌の調べが聞こえてきて、それで俺達は楽しい気分になれる、大丈夫だよ、時には数えきれない程の楽器が一度にぶうんと鳴り出すんだ、でも、それが耳のそばでかすかに響くだけで、時には歌声が混じったりする、それを聞いていると長い間ぐっすりと眠った後でも、またすぐに眠りなってくる— そうして夢の中で、雲が2つに割れて、そこから宝物が降り掛かってきそうになって、そこで目が醒めてもう一度眠って夢が見たいと叫んだこともあったよ¹⁸⁾。

(『テンペスト』第3幕第2場 133-41 行)

この台詞は、Caliban が、Stefano や Trinculo と共に、支配者 Prospero の暗殺を試みる過程で発せられる。つまり、Caliban が語る「歌声」や「音楽」に満ちた「この島」、言い換えれば、彼にとっての一種のユートピアは、その直後に

ed., Shakespeare, *The Tempest* (London, 1990), pp. 232-43.

¹⁶⁾ Alden T. Vaughan and Virginia Manson Vaughan, *Shakespeare's Caliban*, (Cambridge, 1991), Chap. 6, "Colonial metaphors", p. 150.

¹⁷⁾ Ibid., act. 1, sc. 2, lines 334-46.

¹⁸⁾ Ibid., act. 3, sc. 2, lines 133-41.

Caliban の台詞「Prospero を倒せば」が付け加えられることによって¹⁹⁾、あくまで暗殺という目的を達成するための動機として機能させられる。その意味で、ここでも Caliban は、暴力性を具現する‘否定＝他なるもの’としての立場を自ら否定しているわけではないと言える。

しかし、ここで我々が注意すべきなのは、‘否定＝他なるもの’としての Caliban が、一種のユートピア、つまり、西欧の言説における‘肯定＝他なるもの’を語っているという出来事である。なるほど、Stefano らと共に Prospero によって、この島に漂着させられたナポリ王国の老顧問官 Gonzalo が、「君主なるものが存在しない」「あらゆるものを自然が与えてくれる」場所としてこの島を語るとき、この Caliban の島は、肯定されるべき‘他の場所’、つまり、「万事この世とあべこべ」のユートピアとして表象される²⁰⁾。だが、‘否定＝他なるもの’としての Caliban にとっての‘他の場所’は、Gonzalo の台詞のように、Montaigne の『エッセー』に含まれる「食人種について」をプレテキストとしている、といった解釈では捉えきれないものである²¹⁾。そもそも、肯定であれ否定であれ、‘他なるもの’という言説的な‘場所’自体が、Caliban にとって与り知らぬ概念である。にもかかわらず、理解不可能な「他者」あるいは「他者の場所」たるべき Caliban が、その語の意味を構成する‘人間’と‘場所’という要素に、それぞれ否定と肯定という二つの‘他なるもの’に分割されてしまっていること。この台詞では、Caliban のみならず、「この島」、つまり‘Caliban の島’までもが、西欧の言説に取り込まれているのである。そして、西欧から来た植民者達の支配願望を満足させるべき‘場所’であることが、‘否定＝他なるもの’によっても語られたその時、支配すべき〈原住民〉が生み出される。あくまで言説という‘場所’の中で「発見」された‘他なるもの’としての主体、これこそ〈原住民〉の‘場所’である。Caliban の場合、「言葉」は、罵るための手段のみならず、逆説的に、自らの島を奪われる罫としても機能しているとも言えるのである。ここで、以上の考察を、ポスト・コロニアリズムの視点に触れつつ、まとめてみたい。我々が見てきた『テンペスト』における Caliban は、〈原住民〉として設定されたとき、決して「他者」としてではなく、西欧の言説によって複合的に語られた主体であった。また、我々が先に引用した Caliban の台詞が、もともと「植民者の言葉」でしかない、という指摘

¹⁹⁾ Ibid., act. 3, sc. 2, line 144.

²⁰⁾ Ibid., act 2, sc.1, lines 143-152

²¹⁾ Bullough ed., op. cit., p. 243. 及び p.267.

22)。をさらに展開させれば、ここで表象されている‘Calibanの島’は言説の中で想像された‘他なる場所’、つまり〈心象地理(imagined geography)〉²³⁾に他ならない。このことから、たとえこのテキストに〈原住民〉は書かれていないとしても、それはもともと書かれるはずがないもの、逆に言えば、すでに言説によって‘読まれてしまっているもの’であったと言える。つまり、〈原住民〉とは、存在するのではなく、一つの視点が作り出す欲望の対象であり、それを一挙に支配してきたのが、植民者なのである。従って、我々は、ポスト・コロニアリズムの視点を採るにしても、〈原住民〉あるいは〈土人〉という言葉は、差別的であるという理由で消去することはできない。それは〈心象地理〉の言葉、つまり、‘他の場所へ’という欲望そのものの産物なのだ。

3 「他者」性の回帰と〈Territory〉

『テンペスト』における〈原住民＝Caliban〉は、西欧の言説における‘他の場所’と新大陸という「他者の場所」の位相的な‘ズレ’、つまり、前者に後者を含ませる視点の剰余として生み出される。言い換えれば、〈原住民〉の場所は、常に/すでに、その「他者」性が回避された〈原住民‘という’場所〉に先取りされている。従って、ここで読み取られる〈アメリカ〉は、西欧の言説の欲望が作り上げた‘他の場所’に他ならない。そして、我々が〈アメリカ〉というとき、それは「他者」性との出会いとその隠蔽という、言説に組み込まれる瞬間の不可逆性、つまり、原住民を〈原住民〉として表象するために費やされた時間を前提としている。テキストとしてのアメリカという‘場所’は、まず、この種の時間を見いだすための視点なのである。これらのことをうけて、本論の主題である『ハックルベリー・フィンの冒険』における‘場所’の問題に戻ってみよう。

なるほど、‘場所’の移動によって語られるHuckのスリリングな冒険は、最後の‘他の場所’を‘Territory’、つまり、「原住民居住地」の存在に介在されることによって、歴史的暴力の反復という極めてアイロニカルな側面を呈することになる。しかし、〈アメリカ〉という‘場所’が、「他者」性と言説が会う不可逆的な瞬間を語る、という本論の立場にとって、『ハックルベリー・フィンの冒険』というテ

²²Paul Brown, “‘This thing of darkness I acknowledge mine’: *The Tempest* and the discourse of colonialism”, Jonathan Dollimore and Alan Sinfield eds., *Political Shakespeare* (Manchester, 1985), pp. 65-6.

²³E. サイド (今沢紀子訳)『オリエンタリズム』(平凡社、1986) pp. 50-73.

クストと〈アメリカ〉の関係への考察が、新たに問題として提起される。言い換えれば、史実の言葉から文学テキストの言葉を見るのではなく、〈アメリカ〉の言葉としての‘Territory’を検討する作業も、また、為されねばならない。この問題を本論ですべて検討することはできないが、とにかく、そのための一つの試みを示したい。

まず我々は、‘Territory’という両義的な言葉を含む最終章の最終箇所に戻ろう。そこで示される時間は、多難な冒険の中でも、最重要課題であった Jim 解放が、達成された後に示されている：「Tom はもうほとんど治って、あの抜き取った鉄砲玉を時計の鎖に付けて、時計の代わりに首に掛けていた。そしていつでも今は何時かなといったはそれを見ている」²⁴⁾。Jim 救出の際に、ふくらはぎに弾丸を受けた Tom Sawyer (以下 Tom と略記) が、ほとんど全快していることが語る時間は、まさに‘冒険の終わり’である。Tom を傷つけた危険な鉄砲玉が、Tom 自身の時計の鎖に付けられることも、また、Huck が嫌悪するスリリングでありながら最終的には退屈でしかない Tom のゲームへの回帰、つまり‘冒険の終わり’を語るのみである。元来、Huck が町から逃走する要因になったのは、単に未亡人らによる「文明化」や父親の「暴力」だけではなく、そのような社会的・物理的暴力に満ちた町で唯一楽しめるはずの Tom らとの遊びが、退屈だからであった。Huck にとっては、Douglas 未亡人のモーゼの話²⁵⁾と同じく、「Tom Sawyer 盗賊団」は、「日曜学校臭かった」²⁶⁾。なぜなら、そこで Tom が語るアラビア人や象の話が、本に書いてある「過去」でしかないというよりは、「今」においてその「過去」が機能していないからである。これに比べて、奴隷としての Jim の存在は、極めて凝縮された歴史的暴力、つまり「過去」が「今」においても機能していることを示す。そして、Jim を解放するために、Huck はこの「今」に苦悩するものの、彼らの追っ手から逃げることは、Tom のゲームにはない‘冒険’の時間を彼に与えた。この意味でも、Jim が解放されれば、Huck にとっての‘冒険’は終わる。

だが、‘場所’の問題は、もう一つの‘終わり’を暗示する。なるほど、Huck の‘他の場所’への願望は、ジャクソン島を出てからも Jim と共に乗る〈筏〉という場所によって満たされるだろう。しかし、最初の Jim 解放のための目的地カイロを通り過ぎてしまった後の〈筏〉は、Huck がこの場所をいくら賛美しようとも、

²⁴Twain, op. cit., Chap. the last, p. 362.

²⁵Ibid., Chap. 1.

²⁶Ibid., Chap. 3.

「過去」を凝縮した「今」という彼が望む時間が実現される‘場所’ではない。むしろ、そこは、河岸の暴力が及ばないという意味でのみ自由な場所、いわば、何も起こらない空虚としての「今」にすぎない。むしろ、彼が〈河岸／筏〉を絶えず移動し続けることによって、このテキストが‘冒険’としてのダイナミズムを得るのだとすれば、‘他の場所’とは、〈筏〉のみならず、〈河岸〉をも含めたミシシッピ河一帯そのものであると言えるのではないだろうか。二人組の詐欺師の下で働いたり²⁷⁾、また Jim 解放を、再びあの退屈な Tom のゲームにおいて達成しようとするときもまた、Huck は‘冒険’の時間に属しているのだ。つまり、ジャクソン島や〈筏〉といったユートピア的な時・空のみならず、彼が繰り返し記録する〈河岸〉もまた、‘他の場所’だったのである。従って、最後に彼が「Territory へ行く」と言うとき、それは、ジャクソン島への回帰願望というより、まず‘他の場所’としてのミシシッピ河一帯そのものから離れることを意味する。言い換えれば、〈町→‘他の場所’〉や〈河岸／筏〉という図式の後にくるのは、決して〈‘他の場所’＝他者の場所〉というアイロニーではなく、〈‘他の場所’／他者の場所〉という新たな図式なのである。

とにかくある‘場所’から離れること。そして、反復されるだけの空虚な「今」に支えられてだけの‘他の場所への冒険’を終えること。『ハックルベリー・フィンの冒険』というテキストが作り出した、ミシシッピ河という‘場所＝時間’の可逆性を否定する言葉として、〈Territory〉は書き付けられている。そして、それは、単に「原住民居住地」、つまり、歴史的暴力の産物としての「他者の場所」を意味するだけでなく、このテキストにとっても異質な「他者の言葉」として機能しているのである。

²⁷⁾ Ibid., Chap. 19.

